校長室だより～燦燦～ №９０２

エッセイスト

2023.11.18

エッセイの話を続ける。私のまわりにも、いい文章を書く方がいる。毎年、年賀状に短いフレーズを入れる音楽の先生がいる。それが、秀逸である。選ぶ言葉がいい。あの限られたスペースにコンパクトにインパクトのある文を連ねるのは、熟達者でないとむずかしい。一言や長い文章ならば、できそうである。私からすると、中途半端な長さが一番困難をきたす。この音楽の先生は、毎日、ホームページに学校の様子をアップしている。その写真がいい。そして、選び抜いた言葉によるタイトルが見事である。真似できない。きっと、この先生は、音楽家なのであろう。

本校に、２年目の若い英語の先生がいる。学校には、週案というものがある。先生方は、毎週、授業の予定を書き込み、その結果も入れる。反省の欄もある。先生方は、この欄に自由に記述し、有効活用している。この英語の先生の文章がいい。毎週いい。生徒のことをよく見ている。英語の授業や学級のことをよく考えている。彼の文章に通底しているものがある。それは、優しさである。人としての優しさである。私は、彼が生まれ育った町の学校に勤務していたことがある。彼の母校である。だから、彼をつくったベースのようなものがわかる。彼にエッセイを書かせたら、きっといいものができると思う。

先生方が書く文章を目にする機会はそう多くはない。卒業文集くらいだろうか。何かの会報などの原稿を書く場合もある。本校には、３年目の若い英語先生もいる。ＳＳ先生である。彼が１年目のときに、会報の原稿を書く機会があった。提出する前に、私のところに持ってきた。読んでみた。うなるしかなかった。見事である。文章もすばらしいが、そこには、彼の思いがあった。それが、すべてである。「文は人なり」そのとおりである。

先生方は、もっと文章を書き、生徒や保護者に読んでもらえばと思う。話をすることも大切だが、書くことにも価値がある。書いたことは残る、繰り返し読める。書く方は、書くことで考える。それがよい。とはいっても、現実には、なかなかむずかしい。

随筆や随想などのエッセイは、論文などとは違って、形式があるわけではない。清少納言の「枕草子」や兼好法師の「徒然草」の世界である。つれづれなるままに、思いを書き綴るだけである。物語や小説とも違う。論説や評論とも違う。

私の先輩に、毎日、手書きの学級通信を出していた先生がいた。そこには、行事予定や連絡事項などは、一切ない。その先生の文章が書き綴られているだけである。あの頃、その先生は３０代後半だった。すごい人である。とても真似できない。あの頃、私は、その先輩に憧れていた。憧れ、実にいい言葉である。その先生は、言うなれば“教育エッセイスト”なのだろう。「こぶしの花」その先生の学級通信のタイトルである。こぶしは、早春に真っ白なきれいな花を咲かせ、冬が明ける合図となる花である。花言葉は、友情、友愛、歓迎である。